

論文

## 韓国における障害者運動の原点

——韓国小児麻痺協会の活動と「障害問題研究会ウリント」の結成と勢力拡大までに——

鄭 喜 慶\*

### はじめに

世界の障害者運動を見るならば、各国の障害者運動は1960年代から1970年代にかけて「ほぼ同時に活性化」と言われている（田中，2005，p.1）。それらは、他の社会運動からの影響を大きく受けており、「日本は安保闘争や部落解放運動から（中略）アメリカは消費者運動のたかまりや、黒人差別の克服にむけた公民権闘争」（八代・富安，1991，p.114）からのインパクトがあった。

一方、韓国では80年代後半に「障害者運動<sup>1</sup>」が激しく行われた。その運動は、当時民主化運動が広がる韓国社会において、マルクス思想を理念とした社会変革から影響をうけて展開されていた。それは社会変革運動の複数の運動の一翼を担う「部分運動」とされる。

この部分運動の中心にいたのが小児麻痺障害者（軽度障害者）であった。彼らは80年代半ばに20代の青年となった小児麻痺者たちであったが、1950年代から1960年代後半までに流行っていた小児麻痺ウイルスの影響から、小児麻痺に罹った人たちであった。当事小児麻痺に罹った人は10万人から12万人いたといわれている（鄭，2010，p.250）。これらの事情により、韓国障害者福祉の問題は、まさに小児麻痺障害者の成長とともに小学校や中学校の入学拒否事件や就職拒否事件などに発展していき、表面化されることとなり、社会問題化されていった。

本論では、韓国初の障害者運動組織である障害問題研究会ウリント（以下、ウリント）を結成し、80年代後半激しく社会変革運動<sup>2</sup>（Ⅲ-1に詳しい）を展開していた小児麻痺障害者たちの動きに注目した。国が貧しかった時代に生まれ、ワクチンや予防接種ができず小児麻痺障害者にならざるを得なかった人たちが、どのように福祉がなかった時代をくぐり抜け、自分たちの問題に気づき、社会問題化していったかを記述する。また、小児麻痺障害学生たちを支えてきた韓国小児麻痺協会がどのように障害者問題を社会に発信してきたか、そして、そこでクラブ活動や勉強会を行っていた人たちが青年になり、どのように社会運動と接し、障害問題研究会ウリント（以下、ウリント）を結成し、その勢力を拡大していったかという流れを当事者たちのインタビューを交えながら述べる。また、この2つの組織に対する歴史的な位置づけを明らかにし、考察をおこなう。

本論で志している課題の学問的な研究や分析は今までなされていかなかった。2003年代以後、当事者主義への議論があり、障害当事者側から80年代後半の「障害者運動」への評価が始まり、各講演会やセミナーで当時の運動が「部分運動」としての性格をもっていたと言及されている（イ，2003；キン，2005；全，2008）。しかしながらそこでも、組織結成にむかう以前の話や青年障害者たちがその組織にいかなる意義を持っていたかについての研究は、むしろ自分たちのなかでも明確にまとめられていないのが現実である。資料としては、入学拒否事件などはいくつかの文献<sup>3</sup>もあったが、主に当時の新聞記事を中心に参考にした。また、ウリント活動資料集もあったが、結成と拡大までの詳しい内容は記録されてなかった。そのため、結成当時の話や勢力拡張までの内容などは主にインタビュー調査を行って、それを参考にした。

---

キーワード：韓国、障害者運動、ウリント、全国肢体不自由大学生連合、韓国小児麻痺協会

\* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2007年度入学 公共領域

## I. 障害をつくる社会——障害の誕生

### 1. 障害の誕生

韓国戦争（1950年に起こった朝鮮戦争）後、韓国社会は混乱と貧困の時代であり、多くの障害者が誕生した時期でもある。それは2つの理由から考えられる。まず1つ目は1950年に起こった韓国戦争である。当時、南と北の人口をあわせて3000万人であったのに対し、400～500万の人が戦争で障害者となった。戦争の被害者の数は、死亡者よりも負傷者の数のほうが圧倒的に多かった。そのことが、戦争が障害者の数を増加させた大きな要因である（ペン、1993, p. 20）。

2つ目は小児麻痺ウイルスの流行である。1950年末にJonas Salkが、小児麻痺ワクチンのテストに成功し、1960年にAlbert Sabinが小児麻痺ワクチンを開発し、そのワクチンが世界各地で使用された。1960年代、韓国では障害予防に関心が高まり、新生児予防接種プログラムに小児麻痺予防接種が含まれた。小児麻痺が伝染病予防法上2種伝染病として指定されたのは1976年12月31日のことで、小児麻痺が伝染病予防法律上定期予防対象疾病として追加されたのは、1995年1月5日のことである（ソン・ヨンウク、1996）。

上記で述べたように、韓国では50年代後半から60年代後半にかけて小児麻痺障害児が10万から12万人生み出された。このように多くの小児麻痺障害児が発生した原因の一つとして挙げられるのは、当時の韓国が経済的に貧しく、ワクチンを購入する資金がなかったのが大きな原因と考えられる。1968年9月27日の朝鮮日報の記事をみると、「1969年10月保健社会府防疫当局は今年から100万人分の小児麻痺予防接種薬を全国の新生児を対象に接種、保護することを決めた。防疫当局者は成長した子供にも接種するべきだが、現在の予算では新生児だけをカバーするのも厳しい状況であると説明した。そのため予防接種は農村は50%、都市は100%程度になる」と書かれている。

さらに、1950年の韓国戦争によって韓国の人口は大幅に減少したが、60年代に入り経済成長によりベビーブーム（1955年～1964年）が生じたことと交通量が増えたことにより感染者が増加した。しかし、予防薬は不足し、脳炎などがはやり、小児麻痺への対応は遅くなりこのような結果をもたらしたと記述されている。その結果、この時に生まれた多くの幼児が小児麻痺ウイルスにかかり障害を持つようになる。以降幼児たちが10代になる70年代後半から80年代前半にかけて、経済的に貧しい障害者たちは、全羅南道にあるヨス愛養（エヤン）病院<sup>4</sup>で手術を受けていた。その病院はアメリカの宣教師がハンセン病者のために設立し定期的にアメリカから支援を受けており、1960年代から小児麻痺障害者に対する手術は低価で行っていた。

そこで手術を受けたイ・ムンスクは「小児麻痺は下半身に麻痺がくる。そのために、片足が短いひとが多く、骨を伸ばしたり、片足の骨を削る手術が多かったので、成長がある程度終わった10代後半に手術を受ける人が多かった。ヨス愛養（エヤン）病院は低価だったし、手術した人が良くなったという噂がひろがり、全国から手術を受けようと小児麻痺障害者が集まってきた。（中略）そして、手術を受ける1ヶ月ぐらい前からその旅館で泊まって順番をまった。手術しても病室がなくすぐ退院するのでまたその旅館に戻り、通院治療をしたの。本当に人が多く、病院を囲んで小さい村が形成された感じだった」と述べている<sup>5</sup>。

数字として障害の原因は確かに戦争が圧倒的に多かった。しかし、小児麻痺ウイルスの流行から、小児麻痺ウイルスによる障害の発生が多く国民的な関心が高かったとも言える。1961年保健社会部と韓国児童福利委員会が共同刊行された韓国初の障害者に対する実態調査では、『韓国障害児童調査報告書』によると50年代末の障害発生の半分以上は疾病によるものだとされている（ペン、1993, p.19）。

## II. 障害者運動の原点（1）——1965年～1985年

### 1. 韓国小児麻痺協会誕生

1965年の5月に、韓国日報の主催で各分野で活動している小児麻痺障害者6人の懇談会が開かれた。彼（彼女）らは当時専門職である、弁護士、医者などに携わっている人々だった。韓国日報の主催で懇談会が行われて以来、彼らは一ヶ月に一回集まり、さまざまな話を行う中で、当時の社会問題になっていた小児麻痺障害児である後輩のために役に立つことを話しあい、10月に「三愛会」を発足した。「三愛会」の三つの愛とは、まず自分を愛する、次

に家族を愛する、また国を愛することだった。そして、1966年4月26日には「親睦を深くし、小児麻痺児童の健全な育成と權益促進」を目的とする「韓国小児麻痺児童特殊保育協会」を創立する。創立者であるソン・ヨンウクとイ・ワンスはインタビューで「名称を「小児麻痺協会」ではなく「児童特殊保育」を入れたのは当時社会福祉を担当していた政府の所管庁や制度が存在しなかったのが理由であった。ただし、教育に関しては1949年に制定された教育法に特殊学校と特殊学級に規定があったため補助金をもらうことができた<sup>6)</sup>」と話している。

## 2. 韓国初の障害者利用施設としての位置づけ

「韓国小児麻痺児童特殊保育協会」は、1968年にキン・パルボン初代会長を迎え、本格的に小児麻痺障害児に対するプログラムを実施していく。その具体的な活動として、その年の5月4日を「小児麻痺子供のための日<sup>7)</sup>」として定め、各種行事を行っている。1970年から韓国初の障害者利用施設である正立会館を設立する動きがあり、1975年9月30日に正式に開館した。正立会館は、1970年に「社会福祉事業法」の制定により『社会福祉法人』となるが、1977年に「社団法人韓国小児麻痺児童特殊保育協会」を解体し、「社会福祉法人小児麻痺協会正立会館」として名称を変更し、本格的に小児麻痺障害者に対するプログラムを開始していく。正立会館はパク・ジョンヒ（朴正照）大統領からの義援金で建立され、設備内容はアジアと当時の新聞に報道された。「韓国小児麻痺児童特殊保育協会」は設立当時から、大統領夫人であるユッ・ヨンス女史に注目されていたが、1968年に突然夫人が亡くなる。しかし、夫人が亡くなった後も大統領とその娘が障害者福祉に関心をもっていただけで、この施設は政治的なバックグラウンド<sup>8)</sup>をもった韓国を代表する障害者利用施設になった。

事業は、教育プログラムや小児麻痺少年・少女キャンプの実施など、障害を持っている学生向けのものが多かった。そして1979年3月から肢体障害学生の体力評価が学校の体育点数に反映されるようになり、その体力評価は現在でも毎年2回行われている。

このような活動と事業によって、正立会館は障害学生の集まりの場所となった。そこは、彼ら／彼女らにとって、様々なクラブを設立し、社会性を学び、友人をつくり、恋愛するといった経験ができた唯一の場所であった。

小児麻痺障害者にとって正立会館の意味は以下のようなものだった。「自分たちが通っていた学校と家でできなかった悩みや未来の話がそこではできた。そこにいると私たちはすべてのものから自由であった。また、私たちの心の故郷であり、その館長はもう一人の母親である」<sup>9)</sup>。

このように正立会館は韓国初の障害者利用施設でありながら、小児麻痺障害者の自己啓発に大きな意味を持っていた（高，2000，p.34）として韓国の障害者福祉分野でその位置を明確にしていた。

## 3. 障害者問題を社会に発信する発信地として

正立会館はただの障害者利用施設の役割だけで終わってはいない。小学生の時から高校までそこを利用していた障害学生たち（後のウリントのメンバーたち）と多くの小児麻痺障害者たちにとって、正立会館という場所は、先輩たちや親たちが行っていた社会の差別に対する運動から、身体が異なる（障害をもつ）ことによる差別性に気づかされ、自然と社会への抵抗感を持つようにさせる場所でもあった。特に具体的な例を挙げると入学拒否事件とキン・スンソクの模擬葬礼式闘争に対する運動である。

50年代後半から生まれた小児麻痺障害者たちは60年代後半から80年代にかけて入学拒否事件を頻繁に経験していた。特に軽度障害者で歩けたことと、親たちの学歴に対する関心が高かったことから多くの小児麻痺の学生たちは中学校や高校、そして大学に進学するのである。

しかし、筆記試験だけではなく体育能力を求める体力測定の比率が高く、点数を取れない小児麻痺障害学生たちの進学が難しくなっていた。ユン・ Chol学生がその典型的な例である。ユン・ Cholは筆記試験では満点をとったものの体力測定で点数を取れず有名私立中学校に進学ができなかった<sup>10)</sup>。これらの例がすこしずつ新聞に載せられ国民の関心が高まったことから政府と文教部は「特惠」を与える案を作った。しかし、日本でいうところの文部大臣が交替したことからその案は無効になった。そして各新聞は「68年6月7日コン・オビョン文教部長官は中学校や高校は義務教育ではないので、完全な自由競争によって入学しなければならない。一部の不具児童のための「特惠」は一般学生の親による反発がおおきくなると指摘し、彼らに一律に「特惠」を与えることはできないが、校長

裁量により各学校別に行えることを明らかにした」と載せていた<sup>11</sup>。これに対して文教部は世論から非難された。また、「韓国小児麻痺児童特殊保育協会」は特惠が白紙にされたことで対策委員会を構成し、本格的な闘争を展開していくことを決めた。また、親たちも進学対策のための専門機構を構成し、法律を作るための街頭署名運動を展開していた<sup>12</sup>。結局 1972 年から文教部は高校試験で体力測定検査は免除することを決定した。「肢体不自由児たちに一般学校と同じように体力測定検査を実施することは人道的・教育的な見地から正しくないことからこのような措置を行うものである」と明らかにした<sup>13</sup>。

また、1974 年からは大学入学試験で障害を理由とした不合格の例が社会問題になっていた。特に 1976 年には障害を理由に大学に進学できなかった 30 人が当時の大統領の命令によって救済された。これらの事件は 80 年代に入るまで継続的に続けられていた<sup>14</sup>。

このように障害学生の問題について社会や関係者に組織として声をあげたのが正立会館であった。しかし、これらの抵抗活動は一過性のもので継続して展開されることはなく、組織化されることもなかった。入学事件が起きたら、当時の正立会館の館長が被害小児麻痺学生と共に大学に入学の許可を請願したり、文教部長官や大学の総長に涙ながらに願い出ることによって救済された。さらに、新聞に報道されると大統領の指示によって、個人など一部の学生だけが救済された。

加えて、1984 年 9 月 19 日、車椅子を利用する障害者キン・シュンソク（身体障害者 1 級、当時 34 歳）が、「道路の段差を無くして欲しい」という内容の遺書を残して服毒自殺した事件が起きた。キンは当時 5 歳の息子と奥さんの 3 人の暮らしで、部屋の隣に 3 坪の小さい作業室でアクセサリ－を手で作り、南大門市場に納品しながら生活していた。しかし、納品のため 4 日に 1 回外出するたびに車椅子に乗っている自分の環境に絶望していた（朝鮮日報 1984 年 9 月 22 日）。この事件は各新聞の社会面で大きく報道された。

キンの死で、大学正立団など青年学生らは抗議運動（葬式闘争）を展開した。1984 年 10 月 6 日、正立会館で社会保健福祉部の長官（日本の厚生大臣）と国会議員、障害界の有名人が参加する中、第 8 回全国不自由学生体育大会の開会式が開かれた。そこに、大学正立団と障害青年学生は自殺したキンの模擬棺を持ってきて正立会館で葬式を行った。そして、そのまま棺を背負って長官の前まで行き、弔問を要求した。また、棺を火葬するなどの抗議で、全国不自由学生体育大会の開会式は中断された。以後、ソウル市長はソウル市の段差を無くすことを約束したが、当時の闘争はマスコミからは無視さればかりか、若者によるハプニングとして扱われた（キン・ドヒョン, 2005）。キンの死は障害問題を個人的問題としてではなく、社会的な問題として認識させるための重要な役割を果たした。それは障害者の移動権問題を提起した最初の抵抗として評価される<sup>15</sup>（ユ・ドンチョル, 2003、ジョン・ジョンシク, 2008、イ・サンホ, 2004）。また、大学正立団を中心とした青年学生たちによる「模擬葬式闘争」も、社会的認識を根本的な問題とする一つの組織的闘争の意味を持ったとも言える。

正立会館に通っていた小児麻痺障害者たちは自然とこれらの抗議運動を見たり、聞いたりしていた。

そして彼らに個人としてではなく、同じ障害を持っている「私たち」の大切さを子供の時から認識させることで、自然に韓国障害者運動の礎を築いたのではないかと考える。そして、80 年代半ばに大学生や青年になった彼ら／彼女らは、学生運動と社会運動に参加することで、社会運動の理念と思想に触れることができた。

### Ⅲ. 障害者運動の原点 (2) ——1980 年代後半

#### 1. 社会運動から学ぶ——社会変革としての部分運動とは？

韓国は植民地からの解放と同時に民主主義運動<sup>16</sup>が盛んになったが、「韓国戦争によって、物理的・精神的被害は 50 年代を社会運動から急激に断絶させた」（キン, 1995, p.185）。以後、60 年代から 70 年代までの朴正熙軍事独裁政権下で労働運動と学生運動がおきはじめ<sup>17</sup>、80 年代に入りその運動は、急に大きく成長した。それは、クーデターによる全斗煥軍事独裁政権の誕生とその政権に対する反発運動からであった。

それについてキン・ジェギは次のように論じている。「80 年代の社会変革運動は、80 年春の民主化運動の挫折<sup>18</sup>と光州民衆の歴史的な経験<sup>19</sup>を経て、70 年代までの小市民的で自由主義的な社会運動を批判し、克服する中から始まった」。また、「自然発生的で孤立分散的な運動も根本的な変革のためには、組織が必要であるということが社会

的な合意としてみなされていた。これは『運動の科学化』ともいえる」(キン, 1989, p.87)

そして、運動の思想に対しても、「1984年から1985年の間に展開した変革運動論とその論点などからは変革運動の思想的土台としてマルクス主義が本格的に受容されていった過程がみられる」と論じている。(キン, 1989, p.100)

このように80年代韓国社会全般における社会運動はマルクス主義を基盤とした社会主義運動で、労働者階級を通じた社会変革運動の部分運動を目指していた。それは、労働者階級が社会変革運動を主導する主導群になり、学生、農民、貧困層、女性などは補助群として主導群を支え、主導群によって革命を行うことを言う。このような雰囲気の中で青年障害者たちは学生運動や労働運動など様々な場で、社会変革運動に参加し、自然とマルクス主義、社会主義、唯物論、弁証法、金一成の主体思想などに触れ、運動の思想や理念、組織運営と闘争の方式を学んでいた。

そして、青年障害者たちも補助群として障害者運動を展開していくことを目指す「ウリント」という組織を作るのである。社会運動と韓国障害者運動の繋がりについてもウリント結成メンバーである金大聖(キン・デソン)は次のように語る<sup>20</sup>。「80年の光州民衆運動はマルクスの直接的な影響をうけて、以前と違う政治的・理論的観点の中で、みずから発展するようになる。そして、民衆運動勢力の成長は87年の6月抗争<sup>21</sup>と7, 8, 9月の労働者大闘争<sup>22</sup>を通じて爆発し、その頂点を迎えた。そして、変革的大衆運動が拡大する。これは、障害運動にも影響を与え、変革的な障害者運動を展開するために86年にウリントという組織をつくるようになる」。

## 2. ウリントの結成

小児麻痺や障害をもつ子供たちは、社会福祉がほとんどなかった60～80年代前半までは中学校や高校や大学からの入学拒否を経験し、80年代に入ってから、青年もしくは、高校生、大学生になっていた。しかし、「ウリント」を組織した主なメンバーである「ミルアル(小麦の種)」の高校生たちは、幸い入学拒否を経験したわけではなく、差別された先輩たちや事件を見てきた人たちが、高校や大学への進学はそれほどきびしくはなかった。(鄭, 2008)

そして、大学生や社会人になった青年障害者たちは、学生運動や労働運動などの社会運動から学び、韓国の初の障害者の体制変革的な運動団体と言われている「障害者問題研究会ウリント(以下、ウリント)」を1986年9月14日に結成した。彼らは、小児麻痺協会正立会館を利用する高校部クラブの「ミルアル」出身の青年障害者たちで、当時学生運動が盛んであった大学で学生運動に関わった者と、労働運動に深く関わっていた10人<sup>23</sup>が中心であった。彼らは「ミルアル」で、すでに先輩と後輩という関係が形成されていた。85年10月から毎週、社会運動書籍や障害者関連書籍を読みながら、先進国では障害者問題が権利として問題を解決していくことや、責任が国にあることなどを勉強していった<sup>24</sup>。そして、自分たちが学生運動や労働運動の場で学んだことをいかに障害者運動の中で活かせるかについて計画的に取り組んだ。有名大学に在学している障害学生組織である「大学正立団」が73年からあったが、その団体は学生を中心として、一般人の加入を認めていなかった。しかし、ウリントは大学生と一般人がともに人権向上と障害者の福祉増進のために社会変革的な活動ができることを目指して結成された。そして、「障害者福祉の問題の原因は政府当局の無関心、社会の無関心であったと考え、根本的な解決策のために研究作業と実践作業を行う」(障害問題研究会ウリント, 1993, p. 33) ことを目的とした。

また、ウリント結成の核心メンバーである金大成は次のように語る。

「当時、変革的な運動ではない運動は社会運動とは呼んでなかった。私は学生運動から、自然に障害者運動も社会構造を変える運動でなければならぬと考えていた。勇気を持って運動をするのではなく、組織論つまり、組織をどのように構成し、どのように政権に対応すればよいかを考えながらウリントを作ったのである」。

青年障害者たちはウリントの性格を明確にしたうえで、結成したとも言える。以後、ウリントのメンバーたちは社会変革の部分運動を展開していくために全国組織の必要性を感じ、すでに存在していた全国肢体不自由大学生連合(以下、全肢大連)に87年に加入した。一方、研究作業の一環として、86年11月15日に『喚声』誌一号を発行し、解体される92年までの間で計13号<sup>25</sup>が発行された。彼らが韓国の障害者問題に正面から対峙し、問題の解決方法と障害者の権利を勝ち取るための闘争の準備を行っていたことが伺える。

## 3. 全肢大連への加入

全肢大連は、78年に大邱(デグ)で開催された全国障害者クラブ親睦体育大会で障害大学生の全国組織の必要性

を提起した。そして、81年大邱で開かれた体育大会で、大田（デジョン）地域の障害大学生団体である「タクーホス」が参加したことで全国単一学生組織が結成された。当時参加した単一団体はソウルの「大学正立団」、「54会」、「大田のタクーホス」、「大邱（デグ）青い泉」、「清愛会」など5団体であった。82年の7月24日に、全国組織である「全肢大連常任委員会」を結成し、上記の5団体から各2名ずつこの委員会に参加した。

この日を契機に、全肢大連は全国を巡業し、継続して連合大会（主に体育大会）を開き、全国から集まった会員と関係を緊密にすることで情報交換をはかった。以後、1983年に全羅北道「イリ」円光（ウォンカン）大学の「青松」が加入し、湖南（ホナン）地域（全羅北道、全羅南道）が参加し、84年に釜山の「ディディンドル（踏み石）」、87年ソウルの「ウリント」、88年に春川の「エメク」などが参加し、全国組織が結成された（済州道を除く）。（ウリント活動記録集、1992）

この全肢大連への加入はウリントの結成前からすでに議論されていたことである。当時の思想的背景の下で、青年たちは運動には組織が必要であると考えていた。そして、全肢大連に加入するためにも、ソウルにおける組織設立が求められていたと言える。

イは「当時一部の先輩たちの意図は全肢大連へ加入している「大学正立団」に入り全肢大連を親睦組織から運動組織に変化させることであった。（中略）そのために先輩たちは頻繁に討論していた。しかし、社会人と過激な運動を目指す人たちを受け入れることには迷いがあり、結局、それは許せなかった。以降、話し合いを繰り返しながら新しい組織であるウリントを結成したのである。これが84年から86年にかけての出来事である<sup>26</sup>」。

全肢大連のこれまでの活動を見ると、毎年全国を回りながら親睦活動と情報交流をしてきたが、大きな活動はなかった。特に82年におきた法官任用拒否事件に対しては、政府関係者との面談要求と法官任用拒否撤廃意見で終わってしまった。86年には全国障害学生の実態調査を各地域で実施した。これは、後の会員確保のための基本的な土台となり、組織の変化発展の原動力になった（障害者問題研究会ウリント、1993, p. 386-387）。

一方、ウリントは1987年に全肢大連に加入した。この加入は上述したように、計画的なもので、障害者の問題が社会構造の矛盾から生じていると考え、加入により障害者の運動を社会運動の一環とする理論的な根拠を確立する目的があった。このように全肢大連への加入は彼らにとって大きな意義があった。つまり、運動を行うために、第1の必須条件として全国組織と運動する人たちを確保することが重要であると認識されていたからである。

#### 4. 全肢大連内で勢力拡張のための動き

1987年になると、ウリントの2代目の会長になったシンはより強いリーダーシップを発揮した。まず、外部的には全肢大連に加入し、それに積極的に参加しながら全肢大連の中でウリントの位置を明確にした。また、彼は、障害の問題というのは社会の矛盾から生じたひとつの現象であると考え、障害者運動を社会変革の部分運動としての理論的な根拠を準備する期間とした。（ウリント活動記録集、1993）

そして彼らは、全肢大連内での勢力拡大のために本格的な計画をしていた。その中心にいたのが、シン・ヨンホ、キン・デソン、イ・アンジュンの3人だった。彼らは、一緒に全国をまわって会員を確保し、会員の認識を改善させるために全力を尽くした。

シンは自分たちの動きについてこう語る。

「哲学を専攻していた私は説得力ある言葉で会員一人一人に会い、個人的な交流を深めた。学生運動の経験から運動の理念や哲学について詳しく聞いたシンは合宿を通じて、勉強会や研究会を開き、会員の政治意識を高め、社会運動の理念などを教えた。また、イは組織の結束と他の連合会との団結に力を入れたのである<sup>27</sup>」。

特にイの活躍は大きなものであった。イは自分の活動について、みずからの差別経験を織り交ぜながら、当時の様子をこう話す。

「私が通った高校は有名な商業高校で卒業後に就職を目指していた。高校3年の前期から卒業する日には99%が就職していた。勉強ができていた私は、友だちと同じように当然大手企業に就職できると思っていた。しかし、担任

の先生が推薦してくれなかったので、一度も就職試験を受ける機会はなかった。

(中略)卒業後学校の推薦から面接試験をうける機会が何回かあった。しかし、面接官はみんな同じ質問と同じコメントをしていた。「なぜ軍隊は免除されましたか？(中略)この社会は暖かいから勇気と夢を忘れずに生きてくださいね」。その後私は全部の就職試験から落ちた。このような話を全肢大連の学生たちと一晩お酒を飲みながら話すと次の日には変わっていたね。運動の思想や理念とは違ってやはり自分たちの経験を分かち合うことでその絆は深くなっていったと思う。このような活動を1年間私はずっと全国を回りながら続けたな<sup>28)</sup>。

一方、シンはウリントの研究部長と一緒に内的な条件として「全国障害大学生の実態調査を通じて会員を確保すること、障害者主体の政治力確保の必要性を認識すること、全国的な政治意識高揚のための合宿と進歩的な意識をもつ学生が必要であること」などをあげながら、合宿を通じて障害者問題を社会構造の問題として取り上げ、政治意識の高揚を図った(障害者問題研究会ウリント, 1993, p. 387)。

また、88年に入るとウリントのシンが全肢大連の常任委員長に選出された。そして、ウリントは全肢大連の全国体育会でウリントが製作したT-シャツに「悟れ!!」という文句を入れ、参加者に配った。また、学生運動や労働運動から学んだ民衆歌謡<sup>29)</sup>の本を印刷し、参加者らと一緒に歌いながら団結を目指していた。体育大会以外では、障害問題をテーマに2泊3日間の研修会などを開いた。これらの動きは政治意識の高揚と地域間の認識の違いを解消し、共同意識を確保するための土台を形成した。学術講演会、文化行事、障害者問題を社会に発信し、抗議活動などを行い(障害者問題研究会ウリント, 1993, p. 386)、全肢大連はウリントの加入1年で、その性格を親睦組織から社会運動組織に大きく変えることになった。

一方、全肢大連の他の団体から見たウリントについて、全肢大連2代目の会長であるキン・ソンキュは「ソウルから参加していたウリントの活動は地方大学の団体である私たちに大きな刺激をあたえてくれた。自ら入学拒否をされた経験を持つ人もいたはずだったが、私たちは主に親睦活動をしていた。そんな私たちに見えたウリントは力動的で、社会の矛盾や問題を明確に言葉で話せたし、社会運動の理論も持っていた。さらに、歌や体育運動も一生懸命していた。ウリントの活動に憧れるひともいた。彼らはいつの間にか全肢大連を運動組織に変えていた<sup>30)</sup>」。

以後、全肢大連は障害者問題が発生したら即刻に行動することを志していた。その一つ目が、87年12月の大統領選挙期間中には大統領候補との懇談会を全肢大連主体で開いたことである。

このようにウリントは全肢大連へ加入することで、既存のメンバーたちに社会を見る新しい見方を教え、自ら運動現場に介入するまでになった。ウリントは、自分たちが意図したとおりに、全国組織である全肢大連と全国から集まった多くのメンバーたちをバックグラウンドにし、韓国初の障害者運動とも言われている88年の障害者オリンピック反対運動<sup>31)</sup>89年の雇用促進法制定運動と障害者福祉法改正運動の先頭にたち、運動をリードしながら変革的な部分運動としての障害者運動を展開していくのである。これらの運動には障害者団体も一緒に参加していたが、その先頭になったのが全肢大連つまりウリントのメンバーであり、この運動は社会に大きなインパクトを与えるとともに障害者福祉にも大きな発展をもたらした。

## おわりに

これまで、韓国における障害者運動の原点とも言える、韓国小児麻痺協会とウリントについて、小児麻痺障害者の動きを中心に記述してきた。

ウリント結成の中心メンバーは、主に小児麻痺障害者で学生時代の多くの時間を小児麻痺協会ですごしていた。また、障害者福祉が皆無とも言える70年代と80年代に入学(中・高)や就職の差別を受けたり、その人たちを身近で見て成長してきた。社会運動と出会う前まで彼らは小児麻痺協会のクラブ活動、体育活動、そして勉強会などに頻繁に通う中で、入学拒否事件に抗議する先輩や親たちの姿を見てきた。しかし、抗議活動や小児麻痺紹介の動きはそれほど強いものではなく、問題解決も個人レベルの救済で終わり、組織をもち継続的に運動を行ったわけではなかったという限界はあった。また、頻繁に起こっていた入学差別や就職差別は、歩くことができる軽度障害者の社会参加を妨げる差別の典型的な事例であり、長く根強く韓国社会に存在していたものであった。しかし、それは

当時の韓国社会がそうだったように障害の問題は自分や家族の問題にすぎないとされていた。

そんな時代に障害者の差別や問題の中心にいた小児麻痺協会の役割とは単なる韓国初の利用施設に尽きるのではない。障害の問題を社会に発信し、その解決を求めるといった役割を果たしていたのである。さらにそこは、学生だった小児麻痺者たちが自然に集まり連帯を形成でき、後に青年になった彼らの運動の基盤となる場所として、その歴史的な意義があると考えられる。

以降、彼らは青年になり 80 年代韓国の社会運動の影響から障害が個人の責任ではないことに、また、社会を変えなければ障害者問題は解決できないことに気づき、社会変革運動としての部分運動を展開していくのである。そして、韓国初の運動組織であるウリントを結成した。ウリントは最初から全国組織である全肢大連に加入し、全肢大連を親睦団体から運動団体に变化させる目的があった。すなわち、ウリントが全肢大連に加入したことは、障害者問題の責任が社会にあることを言明し、全面的に社会と戦っていくことへの宣告でもあった。そして、このウリントのメンバーたちは、現在まで韓国障害者運動のリーダーとして活動していることなどを考えると、韓国小児麻痺協会とウリントは現代韓国障害者運動の原点だと言えるだろう。

今後の課題としてウリントの本格的な運動の展開とその成果がもたらした社会的な価値を追求していきたい。そして、全世界的に社会運動の沈滞期であった 90 年代に入って、彼らの運動が組織を分離し結成し発展させていった過程、さらには、そこで彼らの運動を支えていた思想や理論についての研究を、今後の課題として残しておく。

## 注

- 1 本稿での障害者は主に小児麻痺障害者で松葉杖をつかった軽度障害者たちである。本稿で扱う 80 年代韓国障害者運動の担い手は、主に軽度の小児麻痺障害者で学歴が高い人々である。
- 2 18年に渡る軍事独裁政権は 79年に終わったものの 80年に再び軍事政権による独裁政治が始まった。これに対して社会運動（学生、労働、知識人などの運動）による政権への反対運動は他の運動との連帯を通じて継続的で組織的であった。そして、その目標は韓国社会全体のシステムを労働者階級によって変える社会変革運動であり、この運動は 90年代まで続いていた。
- 3 ここで使っている韓国語の参考文献は、日本語の翻訳がないため、筆者が日本語に訳したものである
- 4 当時多くの人たちが小児麻痺が治ることを夢見て病院で手術をうけた。お金があるひとはソウルやアメリカへ、お金がない人はヨスヘという話も流行っていたと言われている。
- 5 イ・ムンスクのインタビューの発言、2007年12月。
- 6 ソン・ヨンウクとイ・ワンスのインタビューの発言、2007年7月。
- 7 子供の日が5月5日なのにあえて5月4日にしたのはより社会が小児麻痺児童に関心をよせることを考えていたからである。
- 8 そのバックグラウンドで小児麻痺協会正立会館は政界や社会から大きな関心を得ながら発展していく。70年代障害者福祉特に小児麻痺障害児の権益向上のために大きな役割を果たしている。
- 9 シン・ヨンホのインタビューの発言、2009年6月。
- 10 韓国日報 1967年12月7日の記事
- 11 東亜日報 1968年6月7日、韓国日報 1968年6月8日の記事
- 12 新亜日報 1968年6月8日、京向新聞 1968年6月12日、韓国日報 1968年6月7日、6月8日、6月12日の記事
- 13 東亜日報 1972年1月31日、大韓日報 1972年1月31日、韓国日報 1972年1月31日の記事
- 14 その他、親による障害児殺害事件（1975年）や、施設による知的障害者の疑問死（1974年、1975年、1978年）など事件が新聞に報道されるが、これらの事件に対する抗議活動にたいする記事や記録がないことから学生たちの入学拒否事件よりは社会的な関心を得ることはできなかったと考えられる。
- 15 1978年10月25日車椅子のユン・テホ（当時18歳）が夜明けごろ勉強のため塾へ行くために出かけたが、加速で走っていたタクシーによる事故で死亡した。この事件で障害者に対する便宜設備への国民の関心が高まったが、一時期であった。
- 16 当時の民主主義運動は植民地からの解放で民族主義運動と戦争後だったことから反共産主義運動が高まっていた。
- 17 経済が急成長する一方、紡織工場で働いていた多くの労働者への搾取が目立った。特に70年にあった紡織工場で焼見自殺事件、78年の東一紡織事件、79年のYH労働組合事件などは運動論を論じる際に欠かせない事件である。一方、学生運動では60年代には自由、平等、真理、正義などが重要な争点になり、70年代には理念があげられた。これらの運動は、70年代頭の自然発生的で分散的な運動であったが、70年代の後半になると労働運動が学生運動や社会運動権と連帯し、組織的な性格をもった民主労働組合運動などに発展した。（キン・ギョンイル、1995）

## 鄭 韓国における障害者運動の原点

- 18 80年、戒厳令撤廃と維新勢力（全斗換勢力）退陣を呼びながら、ソウル大学生たちと市民何十万人が80年5月15日ソウル駅に集まり社会民主化を要求する。しかし、継続できず学生のリーダーたちによって解散させられた。その後、軍事政権は学校を9月まで休校させた。5月15日にソウル駅から引き返したことに對して様々な議論や問題提起がなされた。
- 19 1880年5月18日全羅南道光州で光州市民と学生らによる民主化運動がおきた。それに対して全斗換政権は軍事を派遣し、市民と学生らを無差別に鎮圧し、死傷者は1000人を上回った。
- 20 キン・デソンのインタビューの発言、2009年7月。
- 21 当時の軍事政権が次の大統領候補者を軍人出身であるノ・テウに決めたことと今までの人権弾圧に対して、各地域で市民や学生たちがデモ行動を行った。その国民の動きに危機を感じた当時の政権は大統領選挙を直接選挙に変更し、言論自由保障、地方自治体実施など市民の要求を受け入れると発表した。
- 22 労働者大闘争は、全国200ヶ所で同時に行われた韓国労働運動史最大の労働者闘争である。1987年7月から9月まで、3458件の闘争があり、全国で122万人が参加したと言われている。労働者の要求は「労働時間短縮、賃金上げ」などの労働条件の改善で、多くの会社がそれを受け入れた。この闘争を契機に労働者と資本家の力関係が変化し始めたと言われている。
- 23 バク・チュンウ、ソン・ボンムク、キン・ドンホ、シン・ヨンホ、キン・デジョン、イ・アンジュンなどである。彼らは現在韓国障害界で影響力ある立場になっている。
- 24 シン・ヨンホのインタビューの発言、2008年9月5日。
- 25 1986年に1号。1987年に2号、3号、4号。1988年には5号、6号、7号。1989年に8号、9号、1990年に10号、11号、12号、13号が発行されている。
- 26 イ・アンジュンのインタビュー発言、2010年9月13日。
- 27 シン・ヨンホのインタビューの発言、2009年7月。
- 28 イ・アンジュンのインタビュー発言、2008年4月、2010年9月13日。
- 29 デモや集会で歌う歌で主に政治や社会を非難する内容が込められている。
- 30 キン・ソンキュのインタビュー発言、2010年10月3日。
- 31 国は障害者オリンピックに大きな予算を投入する計画を発表した。そこで、障害界はこのオリンピックが障害者の生活実態には関心がなく、国際社会によく見せるための展示的イベントにすぎないという理由からオリンピック反対運動を展開していた。

## 参考文献

- 鄭喜慶（ジョン・ヒギョン）, 2009, 「大韓民国における障害者運動の歴史——当事者主義に至るまでの歴史」立命館大学先端総合学術研究科博士予備論文
- , 2010, 「韓国重度障害者運動によるパラダイムの変換——2000年以後の自立生活運動と移動権連帯運動を中心に」『生存学』Vol. 2 pp.249-264
- 金正植（ジョン・ジョンシク）, 2008, 「障害者青年学校資料集」『ソウル DPI』
- キン・ドンチュン, 1990, 「南韓社会変革運動論研究の問題」『経済と社会』Vol. 7, No. 6 pp. 19-56
- キン・ドヒョン, 2005, 『韓国社会障害民衆運動の歴史——その闘争の記録と評価』ジョン・テス烈士偲ぶ会 編
- キン・ジェギ, 1989, 「80年代の社会変革運動と主体思想」『哲学研究』Vol. 25 No1 pp. 87-132
- キン・ギョンイル, 1995, 「韓国社会運動の歴史と展望：1945-1995年」『徳聖女子大学校社会科学研究所』1（1）:179-202
- 高炳泰（コ・ビョンジン）, 2000, 「韓国障害者運動の段階と向後課題研究」国民大学校行政大学院修士論文
- 李相鎬（イ・サンホ）, 2003, 「韓国障害者解放運動の歴史」『ソウル DPI 青年学校資料集』 pp. 88-104
- ベン・ヒョンモ, 1993, 「1960年代の障害者」『韓国の障害者』韓国障害者政策研究会
- 障害問題研究会ウリント, 1993, 『障害者問題研究会ウリント活動記録集』 障害問題研究会ウリント
- 杉野正博, 2007, 『障害学——理論形成と射程』東京大学出版会, pp. 219-220
- ソン・ヨンウク, 1996, 「韓国障害人変遷史」韓国リハビリ財団講演配布資料
- 田中耕一郎, 2005, 『障害者運動と価値形成——日英比較から』現代書館, p. 1
- ユ・ドンチョル, 2002, 「韓国障害運動の成果と課題」『社会福祉政策』 pp. 56-62
- 八代英太・富安芳和（編）, 1991, 『障害をもつアメリカ人法——ADAの衝撃』学苑社, p. 114

# The Origin of the Disabled People's Movement in South Korea: Activities of the Polio Association of South Korea and the Foundation and Expansion of the Ullimteo Society for Disability Studies

CHONG Heekyong

Abstract:

In the 1950s to late 1960s, about 100,000 to 120,000 children in South Korea contracted polio because of the spread of the polio virus. When these children with disabilities grew up, they faced discrimination in education and employment in the 1970s and 1980s, as there was no welfare system to support them at the time. This social problem has continued during their adulthood. This paper discusses the social role and position of the Polio Association of South Korea, which appealed for social justice in the face of discrimination against people with polio. In the 1980s, the people with polio, in their 20s then, were inspired by and learned from the active social reform movements in South Korea at the time. They transformed the National Union of Students with Physical Disabilities, which was an organization to promote mutual friendship, into Ullimteo, which was an activist organization for disabled people. Ullimteo was the first activist group to deal with the issue of disabilities as a social problem, not as a personal tragedy, and it was the first disabled people's movement in South Korea.

Keywords: South Korea, disabled people's movement, Ullimteo, National Union of Students with Physical Disabilities, Polio Association of South Korea

## 韓国における障害者運動の原点

——韓国小児麻痺協会の活動と「障害問題研究会ウリント」の結成と勢力拡大までに——

鄭 喜 慶

要旨:

1950年代から1960年代後半にかけて韓国では小児麻痺ウイルスの流行により、10万から12万の小児麻痺障害児が誕生した。以降、彼（彼女）らは福祉が皆無とも言える70年代と80年代に入学や就職から差別をうけるようになる。それらの問題はずっと続き、小児麻痺障害児の成長とともに表面化されたり社会問題化されたりしてきた。

本稿では、小児麻痺障害児たちがどのような社会的な環境から10代をすごしたかを明らかにする。また、20代で当時の社会運動から学んだ部分運動を行うために、親睦組織である全国肢体不自由大学生連合を障害者運動組織に変え、運動メンバーを増やしていく経緯を描いていく。

また、ウリントを結成した青年障害者たちが目指したのは、障害者問題を個人の問題ではなく社会的に問題化していくことにあった。本稿は、ウリントは韓国初の障害者運動組織であり、それが韓国障害者運動の原点であることを主張するものである。